

研究論文

木剣と楊枝の紐帯 それに介在するもの

玉木 晃 仁

【はじめに】

昨年（令和四年十一月）第二十三回日蓮宗教化学研究発表大会において、「木剣起源の一試論―七面大明神との関係―」（『教化学研究』第十四号所収）の発表に際して、やむなく時間と紙面の関係で削除した部分に加筆・再構成したのが本稿である。

享保十七年（一七三二）正月刊行。当時の日蓮宗修法の故事一般を蒐集した忍辱鎧日栄（？）一七二二『修験故事便覧』に、木剣の起源・由来が記載されている。

伝え聞くことによれば、昔、身延山に日閑という僧がいた。仏神に日本第一の験者にならんと誓願し、寺務檀縁を遮断して行を修めるべく波木井川の辺に方丈を構え、端坐安詳として誓って言われた。「私が今着ている如法衣の縦糸と横糸の数だけ陀羅尼を誦誦する」と。毎日の便ごとに流水で身を浄め、神呪の誦誦は昼夜を問わず、体力の続く限り精進した。鍼を刺して三年を経た。（自分への治療か？）また七面山に参籠すること一百日。社壇に六寸の楊枝

を供え誓願して言われた。「私の所願に満足されたならば、霊端を見せて下さい」と。陀羅尼品を誦誦し毎日二百遍。一日も懈怠しなかった。七面大明神の感応により、供えた楊枝が飛騰して日閑の掌に移った。動作に神（たましい）があるようだった。少しして止んだ。日閑は所願が叶ったと随喜し頂戴して帰った。こののち祈禱加持をするときには必ず楊枝を使用する。病が癒えないことはなく、鬼は去らないことはない。そのことから積善の楊枝加持と称された。自門流・他門流ともに木剣を使用する際は、身延積善房の木剣をなぞるべきではないだろうか。

『修験故事便覧』には、七面大明神から日閑に飛騰して来た楊枝が木剣の起源であり、身延積善房から各流派に伝播したと明記されている。今日の木剣は、主に九字を切り、音を出すことを目的としているため、材質は楊枝ではない。木剣は加持杖からの派生。または勝の木が起源という説も存在している。しかし今日でも木剣のことを、楊枝木剣または楊枝と修法師の間でいうこともあり、その伝統は脈々と継承している観がある。

楊枝から一般の方は爪楊枝、仏教学を学習された方、禪宗の方は歯ブラシ、医療に携わっている方は、鎮痛作用のある薬用植物を連想すると思う。歯ブラシ・爪楊枝として使用することは、歯痛を鎮めるのに医学的に理に適っているようである。楊枝は古代から霊木的一种として意識され、呪術にも用いられ、神秘的伝承、説話も多い。また観音信仰にも深く関係する。木剣成立の黎明期である江戸時代初期は医療の脆弱な時代であり、薬草と同時に呪術的植物と認識されていた。本稿は木剣と楊枝の紐帯 強い結びつきに介在するものを探ることを目的としている。

【七面大明神と楊枝の関係】

『修験故事便覧』だけではなく、『本化別頭佛祖統記』所収「甲州身延積善坊第十代日閑法師傳 附日傳」・亮朝院の縁起に多少内容の相違はあるが、修行僧が七面山での修行した際 修行僧のもとに楊枝 もしくは楊枝ともとれる枝が飛翔して来る共通の神秘譚が確認できる。

そもそも、なぜ七面大明神の社壇に楊枝を供えたのだろうか？理由について、七面大明神と楊枝との関係を思索してみよう。

まず修法と楊枝の関係について、沼義昭（一九三〇～二〇二三）によれば、

楊枝による加持は、修験道直接の諸書においては、まだ管見に入らないが、天台系に伝えられた楊枝浄水法が、現に京都の蓮華王院（三十三間堂）で毎年一月十五日に修せられて、よく知られている。これは『摩訶止観』の四種三昧の一つ、非行非坐三昧に初めて説かれたもので、その弟子章安から宋代の慈雲大師遵式へと伝えられて発展し、日本では皇慶（九七六～一〇四九）の『四十帖決』で初めて現われ、鎌倉時代の日蓮聖人の年代とも一部重なる頃編纂された『阿婆縛鈔』巻八十四において、「請観音一亦名楊枝浄水法」として継承されている。『摩訶止観』において、阿弥陀三尊の像を請じて西方に安んじ、楊枝浄水を設けることが命ぜられているが、この楊枝と浄水とは、このいわゆる観音懺法の一貫した要素となっている。^{*5}

簡潔に楊枝と観世音菩薩との関係を記している。台密の儀礼 楊枝浄水法について補足すれば、楊枝浄水法（請観音法とも称する）は『請観音菩薩消伏毒害陀羅尼咒經』（以下『請観音經』）を経証として、疫病を除くことを目的に観音菩薩に供養する方法・儀礼である。請観音經は旧訳のため行法・儀則が整備されていないため、『阿婆縛抄』・『摩訶止観輔行伝弘決』を引用・補足して、儀礼を行っている。^{*6}その儀礼の内容は、鎌田茂雄（一九二七～二〇〇一）によれば、南向きに観音像を安置するのは、観音の住処が南方光明山であるからである。（中略）楊枝浄水を供えてから、西方に向かつて、五体投地し、一心頂礼本師釈迦牟尼世尊 以下諸仏の名を唱え、さらに「一心頂礼大勢至菩薩摩訶薩」と唱える。次に三度三宝の名と観世音の名とを唱え、つぎに合掌して偈文を説き、三つの呪文を唱え終って懺悔発願し、楊枝浄水の壇の周囲を廻るのである。最後に『請観音經』を唱えてこの作法は終わる。^{*7}

ここまでで修法に楊枝を用いることは、台密で観世音菩薩と深い関係性があることが確認できる。

ここから七面大明神と観世音菩薩との関係を考察したい。七面大明神の縁起は多様にも関わらず、その尊像・絵画の持ち物について言及されず、尊像・絵画には右手に輪なま、左手に宝珠と統一されている。持ち物から日本選述偽経を経証とする宇賀弁財天から変態（メタモルフォーゼ）した神が七面大明神であり、台密の宇賀弁財天の秘法を身延積善房修法が儀礼吸収する過程で編み出されたのが木剣であると推理した。^{*8}

天台宗の学僧 光宗（一二七六―一三五〇）により応長元年（一三一―）から貞和四年（一三四八）までの叡山天台の行事・作法や口伝法門などを集録した『溪嵐拾葉集』^{（ふたけいしゅうようしゅう）}に宇賀弁財天の弁天法が確認できる。宇賀弁財天の特徴について、

宇賀辨財主ニ福徳。^{*9}是観音所變ク辨才也。

宇賀弁財天は福徳を主り、観音の変化身なのだという。日本選述偽経で宇賀弁財天の経証となる『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』によれば、

爾時ニ仏告テ大衆諸ノ大菩薩ニ言ク。汝等於テ此ノ神王ニ莫レ作コト輕慢ヲ。此ノ神王ハ在テ西方淨刹ニ号シ無量壽仏ト、
在テ娑婆世界ニ称ス如意輪觀音ト。正シ生身ノ体ハ居ニ日輪ノ中ニ照ス四州ノ閻ヲ。

仏は諸々の大衆・菩薩にお告げなされた。あなたたちは、この神王（宇賀神王）を輕慢してはいけない。この神王は、西方淨刹では無量壽仏といい。娑婆世界にあつては、如意輪觀音と称する。生身の体は日輪の中にあつて、四州の閻を照らす。

以上、台密の儀礼の中で、宇賀弁財天は観世音菩薩の化身と認識されていたことが確認できる。身延積善房で、七面大明神は、宇賀弁財天を通して観世音菩薩と関係があることが認識されていたと推理する。それについて岐阜県大垣市 大塚山宝光寺の事例を紹介する。

宝光寺は、元禄四年（一六九一）充足院日東により創立。創立された元禄四年、身延より七面天女像が移された。

通称 七面堂と近隣では親しまれている。^{*11}宝光寺と名付けられた理由を推測すれば、『妙法蓮華経』序品の「復有名月天子 普香天子 宝光天子」について天台大師智顛（五三八～五九七）『法華文句』卷二下の注釈によれば、

名月は、是れ宝吉祥、月天子にして、大勢至の応作なり。「普香」は、是れ明星天子にして、虚空蔵の応作なり。

「宝光」は、是れ宝意、日天子にして、観世音の応作なり。此れは即ち本迹の积なり。^{*12}

創設に関わった僧侶が、『法華文句』を根拠として命名したことは、七面大明神と観世音菩薩との関係があること。宇賀弁才天の影響を認識していた可能性がある。

七面大明神の社壇に楊枝を供えた理由は、身延積善房は、七面大明神は宇賀弁才天の変態であり、宇賀弁才天を通して、観世音菩薩の化身と認識していた。それに観世音菩薩と関係の深い楊枝浄水法を儀礼吸収したことによる。さらに言えば、宇賀弁才天 楊枝浄水法ともに台密の儀礼である。身延積善房創設時、直接なのか間接なのかは不明であるが、木剣と楊枝の紐帯に台密儀礼の介在が確認できた。

【身延積善房流伝書からみる木剣の材質】

身延積善房の伝書類には、楊枝とは異なる材質の起源逸話が確認できる。身延積善流の伝書類は、宮崎英修『日蓮宗の祈祷法』所収「第二部 身延積善房伝書」を用いる。積善房は、明治三年（一八七〇）焼失、再興されなかった。点在する相承された伝書を蒐集・活字化した貴重な資料である。ただし伝書の性格上、年代特定は不可能である。それでも日蓮宗修法の世界を垣間見ることができる。

再行修了者が書写を許される『仙応房加行相承次第』には、

終に身延山一流加行七面御夢想の御祈禱を為し、既に一千百日を満じ、下向の時、麓に勝の木の小木あり、日慧、明神の尊前に返り、誓願すらく、意の如き小木之有り、生木にては明神の瑞意に叶い難し、願わくば朽木となし

て、某に与え玉えとて、一七日祈願在つて、下向して見るに、勝の朽木れて古木となる。此の朽木を申し受けて、七本の木剣を作り、其の木剣に瑞相を請願せるに、七本の木剣一同に立ちて日慧に向かう。謹んで按ずるに、神明の瑞、愚意の許るべき所に非ず、正しく七面現瑞三度也。仙応房一人は瑞相を得て加持す。

(宮崎英修『日蓮宗の祈祷法』(以下『祈祷法』) 三二七頁)

注視すべきは、木剣の材質が楊枝ではなく勝の木である。文化三年(一八〇六)庚辰九月日に普門院日憲により書写された「身延積善房流祈禱相承之叟」には、

一、楊枝之事

木劍なれども、当流にては必ず楊枝守と唱う可きなり、則ち積善坊楊枝加持と古来より申し伝うる故なり。楊枝の長さ六寸とはいえども、我が手の空指と火指とにて、寸をとる故、やがて七寸に近し幅の広さを加持楊枝と称し、狭きを引取楊枝と称して万事に用ゆるなり。(『祈祷法』二三四頁)

木劍一般を積善房では楊枝守というべきであり、古来より申し伝えがあったのが理由なのだという。さらに「祈禱重重口決之事(運師御伝書)」の四方詰祈禱口伝の事には、

尚一伝には、桃の木又は勝の木の楊枝(長さ七寸)に四方詰の守を書き、病者の四方へ立て祈念す云云。

(『祈祷法』三七六頁)

必ずしも楊枝(木劍)は植物の楊枝ではなく、名称が楊枝であり、祈祷する目的・用途によって材質を換えていることが確認できる。

また木劍は、多様な用途があったようである。一つの事例として『修験故事便覧』に日閑が「每遍利鍼三年ニシテ既二果シヌ」と自分に鍼を打っているかのような行為が確認できる。宮川了篤氏によれば、「病と経路・木劍との密接な関係という視点からすると、「身延山文庫」に身延積善坊流木劍と一諸の箱に納められている、「針六〇本・竹釘

五四本・金釘二本」は、経路との関係があつたのか、それとも足留の呪いで使用した物か、今は判然とし^{*13}ない」と指摘している。

以上まとめれば、身延積善房では木剣は材質に関係なく楊枝と称した。鍼として使用した可能性もあり、使用用途に多様性があつた。今日の日蓮宗修法は、木剣を用いて九字を切る儀式が主流である。明治維新による近代西洋医学を主軸とする医療改革が宗教の分野にも影響を与えた結果、創案・実施^{*14}された。身延積善房の伝書類から多様な楊枝・木剣の用途があつたことが確認できた。

【むすび】

身延積善房流で編み出された木剣と楊枝の紐帯に介在するものに言及した。七面大明神の社檀に楊枝を供えた理由は、七面大明神は宇賀弁才天が変態した神で、宇賀弁才天は、『溪嵐拾葉集』・日本選述偽経の『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』から観世音菩薩の化身と認識されていたこと。観世音菩薩と関係の深い『請観音經』を經証とする楊枝を用いた儀式 楊枝浄水法を吸収・消化したことによる。このことが起源となり、木剣へと展開したと推理する。

身延積善房の伝書から、木剣は多種の材質の木剣があり、今日の日蓮宗修法の主流である九字を切る儀式以外にも多様な儀式があつたこと。材質に関係なく楊枝守と称したことを確認できた。今日、修法師の間で木剣のことを、楊枝木剣または楊枝ということもある原形があつた。

木剣は、直接か、間接的にか、台密の儀式を消化し成立した。信徒に祈禱を施すなかで、それ以外の思想儀式を受容し、独自展開したと思う。まだまだ木剣について提唱したいことがある。機会を作り発表したい。

発表の際の反省がある。聴衆は修法師ばかりではない。無関係者が多いことに注意を払うべきであつた。質問が勉

強くなった。課題としては話術向上。避けてきた霊的なことへの言及にも挑戦したい。

- *1 加藤瑞光 宮川了篤編『日蓮宗祈禱聖典』二二四～五頁 宮川了篤「日蓮宗「修法祈禱による木剣の歴史」『三友健容博士古稀記念論文集 智恵のともしび アビダルマ佛教の展開』において要約のみで「積善坊日勇（日閑の誤り）」（三七四頁）とある「日閑寂後一三〇年後の風聞であるため、日閑は日勇と伝わった」（三七四頁）のだという。宮川氏自身が編者である『日蓮宗祈禱聖典』所収『修験故事便覧』には日閑と表示してある。また翻刻の際の底本は記されていない。「享保第十七年歲次壬子正月吉辰 安政三歲次丙辰正月補刻」とある西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵『修験故事便覧』には日勇とある（五卷三十六丁左～三十七丁左）。服部如實編『修験道要典』（三密堂）所収の『修験故事便覧』には日勇とある。あとがきには編纂中に服部如實が亡くなり、木村光延が引き継いだ旨が記されている。（七一七頁）翻刻する際の底本が記されていない。田中日常訳『修験故事便覧（現代語訳・註解）』には唯観房日勇と訳し（一八五頁）註もされている（一八八頁）こちらも底本は記されていない。
- *2 日蓮宗大荒行堂・遠寿院に百日間の荒行を成満（修了）した主に日蓮宗僧侶
- *3 『本化別頭佛祖統記』四五六～七頁
- *4 坂本勝成「江戸の七面信仰～高田の亮朝院の中心に～」『日蓮教学研究所紀要』第三号に立正大学日蓮教学研究所有の縁起を翻刻され、資料としている。
- *5 日蓮宗大本山法華経寺『中山法華経寺誌』二一九頁
- *6 『密教大辞典』一一三二頁 a b 参照
- *7 鎌田茂雄『観音さま』一一三～四頁
- *8 拙稿「木剣起源の一試論―七面大明神との関係―」『教化学研究』第十四号

* 9 『大正新修大藏經』七六卷六二〇頁b

* 10 山本ひろ子『異神 中世日本の秘教的世界』（一九九八年初版）四七八頁 同書に弁才天三部経が翻刻・収録されている。

山本氏によれば、「資料Ⅰ（弁才天三部経）（仮題）は、叡山文庫・生源寺蔵写本『宇賀経』と、円覚蔵刊本『弁才天三部経略疏』の採択した本を校合の上、翻刻した」（四七五頁）とある。

* 11 大本山池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』五五四頁参照

* 12 菅野博史訳注『法華文句（Ⅰ）』（二〇二〇）三頁 『大正新修大藏經』三四卷二四頁aを訳注

* 13 前掲 宮川了篤（二〇一六）「日蓮宗「修法祈祷による木剣の歴史」」『智慧のともしび アビダルマ佛教の展開 中国・朝鮮半島・日本篇』三七九頁、山喜房佛書林

* 14 同右 三九〇〜九三頁

昨年の教化学研究発表大会の原稿を校正しているとき、龍神楽所（村上敏教代表）女将 若狭直美氏よりお声がけ頂き、本年令和五年五月十二日 天河大弁財天社（奈良県吉野郡天川村坪内）に参拝・龍神楽所の一員として雅楽奉納させて頂いた。天河神社の祭神は、宇賀弁才天である。何か感じるものがあった。呼ばれたのかもしれない。